

中国近代の明、清時代に、三つの大きな商人集団がありました。世界的に知られている安徽省の「徽商」、山西省の「晋商」、広東省の「潮商」です。「晋商」はその中で一番の位置に置かれていました。

明から清までの500年の間、山西省は中国でもっとも豊かな省でした。史籍の記載では、15世紀から19世紀まで、山西商人は穀物、塩、棉布、鋳物、茶葉などの商品を途切れることなく広く商い、北方周辺の朝鮮、モンゴル、ロシアなどの国々だけではなく、南の香港、東南アジア、東の日本、ないしヨーロッパまでも販路を広げていました。資料によると、当時、中国全土の十大富豪は、全部山西人だそうです。当時、主として北方貿易を行っていた有名な「大盛魁」という商社は駱駝を十萬匹も保有し、従業員は7000人もいたそうです。

十九世紀の前半になって、山西商人は中国の近代金融の発祥と

して、更に金融業者「山西票号」（両替商）を創立し、今の銀行に当たる送金為替までも経営し始めました。昔、流通した貨幣は銀塊ですので、送金を為替にすれば、重い銀塊を長距離輸送する必要がなくなり、安全性や、利便性などのメリットが生じ、沢山の商人たちに喜ばれ、利用され、それ以来、「山西票号」は全国の貨幣と資金調達業務を独占し、支店は朝鮮や日本にまでも広がりました。

山西商人は勤勉、素朴、節約、誠実、礼儀の正しさなどの資質で商の世界に君臨するようになり、同時に、白銀をどんどん故郷に持ち帰り、大量の資本を集めました。資料によれば、清代に全国の前列に並んでいた大手商社は殆ど山西の商社で、山西省に蓄積された白銀は、清政府の国庫のものよりも遥かに多く、まさに「富可敵国」（裕で国に勝つ）という言葉の通りでした。

山西商人たちはお金を蓄積するばかりではなく、それらのお金を、手工業、冶金工業、石炭工業、塩業工業、乃至は教育や文化の分野に投資して社会の経済と文化の発展に力を注ぎました。

清政府も後に、山西商人の顧客となって山西票号にお金を預けたり、貸したりするようになり、山西省は「清政府の財務部」とも言われていました。その間、もちろん山西商人は清政府から、色々商売上の便宜を得ましたが、国が自然災害に遭遇した時、政府の財政が困窮した時、軍事行動を始めた時は、政府のためにお金を立て替えたり、無償で寄付したりという事実も数え切れません。

山西商人たちは、商売管理の面でいろいろな規則を定めていましたが、家族内でも厳しい家法を守っていました。著名な商人喬家の家法には「アヘンを吸っていけない、賭博をしてはいけない、妾を持つてはいけない、女遊びをしてはいけない、下人を虐待してはいけない、お酒に溺れてはいけない」などのようなものがありました。今の山西省には、あちこちにその時代の旧大邸宅が残されています。「喬家大院」「王家大院」「常家大院」「渠家大院」などがその代表です。



喬家大院 中国映画「紅夢」（チャンイーモー監督、コンリー主演）の舞台にもなった。

現在、山西省の観光旅行には、世界文化遺産に登録された「平遥古城」や、山西商人の住宅の代表格の「喬家大院」が観光コースに組み込まれています。「平遥古城」には、昔の商社、銀行などの部屋がそのまま保存されていて、当時の営業の様子や商社を管理する風景を見ることができ、また、「喬家大院」では、当時の豪商の生活ぶりを覗き見ることが出来ます。

「三十年河東、三十年河西」（物事が良く変わる意味）という古い諺があります。山西商人も、輝く500年の歳月を経、清代末頃になりますと内外戦争や社会の動乱、そして新しい金融方式の出現などなどの原因でだんだん衰微して行きました。

私は、友人たちを連れて、何回もそれらの町、豪邸を見学した事があります。その壮大で古典的な雰囲気や漂う町を歩きますと、回りの木々や建築物などが観光客に、遠い昔のご主人様と家族たちの栄光の物語を語っているような感じがします。